

情熱 えひめ 女子アスリート

バレーボール 栗林 愛美 (20) 松山東雲女子大

音に頼らず連係磨く

の音が聞き取れなくて練習を止めてしまったりして悩んだこともあった。家族や友人の支えの中で腕を磨き、聖カタリナ学園高3年の2022

年、聴覚障害者のデフバレー日本代表の最年少メンバーとしてデフリンピックに出場。今夏の世界選手権では優勝を経験した。

を判断するなどできるが「最初はすごい困った。これまで音に頼り過ぎていたんだなと思った」。補聴器を外した状態で家の中で過したりボールを触ったりして慣らしていた。

国際ろうスポーツ委員会（ICSD）の規定で、国際大会では競技場内での補聴器使用は認められていない。補聴器があればボールを打つ音で強さ

代表チームでは手話や表情を読み取って綿密にコミュニケーションを図り、コートではアイコンタクトも使う。世界選手権でも体格差のある海外選手に「どうやったから勝てるか、みんな考えて」と一つ一つプレーしながら話し合う大切さを学んだ。同じポジションのエース選手に憧れ「苦しい場面でも決めて、チームを引っ張る姿が格好い」と刺激を受けている。

来年11月、東京でデフリンピックが開かれる。世界選手権はベンチスタートだったことに触れ「競争は厳しく、まずは代表メンバーに選ばれること」と目標を語る。そして、その先の金メダルへ「自分ができることを全力で発揮したい」と今日もコートで汗を流す。

「もう一本！」「前へ！」。練習中の松山東雲女子大バレーボール部員の声が体育館に響く。アウトサイドヒッターの2年栗林愛美(20)もボールをつなぎ、スパイクを打ち込んでいた。

先天性の難聴で、補聴器をつけて生活している。スポーツに親しむ家族の影響で小学4年の時に「自分もやってみよう」とバレーを選んだ。中高でも部活動に力を注ぎ「団体競技は仲間と励まし合える。誰かが良いプレーをしたら、次の良いプレーにつながっていくのが楽しい」。

子どもの頃は言葉の聞き間違いからチームメイトとすれ違ったり、監督



松山東雲女子大バレー部の練習で汗を流す栗林愛美
11月下旬、松山市

デフリンピック 聴覚障害者の国際スポーツ大会。1924年に第1回パリ大会があり、身体、視覚、知的障害が対象のパラリンピック

〈随時掲載します〉
(中野貴衣)